

実践報告

## 児童の伴走者としての教師の在り方

ある国際教室の教師と児童の1年半の日本語指導から見たこと

塩田 紀子 \*

### ■要旨

ある小学校の国際教室に通う児童が、国際教室の教師の指導を受け、1年半で、日本語を読む力が大幅に向上し、学ぶ姿勢が変化した。それは、ある小学校の国際教室の教師が、児童に学びの楽しさを知ってほしいという願いから、その目標に向かい、児童の課題を様々な面から把握し、児童の精神面を支え、児童に適応する指導法や指導内容を徹底的に考え、実施したからであった。教師の課題把握から、その課題克服のために実施した1年半の様々な日本語指導、それらの指導を実施した理由、また、どうして児童のことばの学びが進む授業ができたのかを、実践記録、教師の質問紙への回答、メールでの質問への回答から探った。そして、児童の読む力を伸長し、学ぶ姿勢を変化させるのに、何が必要だったのかを考察した。

© 2023. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

### ■キーワード

国際教室、  
目指す子ども像、  
学びの楽しさ、  
課題の把握、  
教師の知識・経験、  
児童に適応した指導、  
伴走者

## 1. はじめに

本稿では、国際教室担当のS先生が児童Kに実施した1年半の日本語指導から、Kの読む力を伸長し、学ぶ姿勢を変化させるのに、何が必要だったのかを考察する。

私は、2022年4月に、T小学校に日本語母語支援員として派遣された。T小学校には国際教

\* 教育委員会派遣日本語母語支援員

室があり、国際教室担当は2022年4月に担当になったばかりのS先生であった。S先生は教師歴15年の教師だが、国際教室担当は初めてであった。私はS先生と共同で、当時2年生の児童K（以下、K）に日本語指導（以下、指導）を行った。私の指導時間は月に3時間（途中から2時間）と限られていたため、Kの在籍学級での様子や学習状況、S先生が行っている指導内容、Kが日本語や教科の学習で、何につまずいているか、その対応をどうするかなどS先生と情報を共有し、ときには、問題への対応策を考えながら指導を進めた。

Kは幼少期に来日し、家庭では英語を使用している。日本の保育園に通っていたため、日常での日本語のやり取りは問題がなかったが、文字の習得が難しく、読み書きに苦手意識をもっていた。またKは、母語である英語の読み書きも難しいようであった。そのため、Kは1年生から国際教室で日本語と教科指導を受けていた。Kは明るい性格で、教師や他の児童から好かれており、国際教室の授業が終わると在籍クラスの児童がKと遊びたくて、国際教室に飛び込んでくるが多かった。ただ、在籍クラスの授業では、内容が理解できず、教科学習に参加できない様子が見られるとのことだった。

特に課題であったのは、Kの日本語の読み書きである。指導当初、Kは日本語の読み書きに抵抗感を示し、それが原因で学習に気持ちが向かなかった。しかし、S先生の指導のもと、1年半でKの読む力が伸長し、積極的に学習に向かうようになった。

私は、短期間で、Kの読む力が伸長したこと、学ぶ姿勢が変化したことに驚きを感じた。そこから、Kに読む力の伸長、学ぶ姿勢の変化をもたらすために、何が必要だったのかという問題意識が生まれた。そして、以下の3つの研究課題を明らかにすることで、問いの答えが見えてくると考えた。

1. S先生はKの課題をどう捉えたのか。
2. S先生は、Kの課題を解決するために、どのような指導をしたのか、それはどうしてなのか。
3. S先生は、どうしてKに読む力の伸長、および学ぶ姿勢の変化をもたらす指導を考えることができたのか。

私は、S先生とKに日本語指導を行っていたが、前にも述べたように、月に3時間（半年後に2時間に減る）というわずかな時間であった。次回の指導が3週間後など、しばらく指導の間が空き、その後指導をした際、Kの日本語を読む力の伸びを実感した。そのため、S先生の指導が、Kの読み書きの力の伸長や、学ぶ姿勢の変化に大きく影響を与えていると考え、S先

生がKの課題を把握し、課題解決のために実施した指導やその指導をした理由から、問いの答えを探ることにした。

私がS先生の指導を直接見学したことはない。しかし、Kの指導の際に、S先生がKに実施している指導内容、Kの様子、Kの変化などについて聞き、ノートに記録していた。ノートに記録した内容から研究課題1と研究課題2の答えを探り、研究課題2の指導内容の詳細、および、指導を実施した理由を明らかにするために、さらに質問紙で、S先生がKに実施した指導、およびその理由を聞いた。その過程で、S先生が、どうしてKに読む力の伸長、および学ぶ姿勢の変化をもたらす指導を考えたのかという問いが生まれた。そこで、それを研究課題3とし、それを明らかにするために、さらに電子メールで、S先生がどのように日本語指導が必要な児童に向き合ってきたのかを聞いた。S先生が、Kに読む力の伸長、および学ぶ姿勢の変化をもたらす指導を考えた理由に、S先生が今まで日本語指導が必要な児童に教えた経験と児童への向き合い方が関係しているのではないかと考えたからである。

したがって、自分の記録と、その後の質問紙と電子メールによる質問へのS先生の回答を分析データとして使用し、問いの答えを探る。

本稿では、2章で、S先生が見たKが抱える課題、3章で、S先生がKに実施した指導およびその理由、4章で、S先生の指導によるKの変化、5章でS先生が日本語指導が必要な児童に向き合う姿勢を記述する。6章でまとめとして、Kの読み書きの力の伸長、学ぶ姿勢の変化をもたらすのに必要なことは何であったのかを考察する。

## 2. S先生が把握したKが抱える課題

S先生は、Kが学習に対してどのような課題を抱えていると捉えていたのかを私（以下、塩田）の記録と質問回答紙の返答から見ていく。

S先生は、1年生のときに指導していた国際教室担当の教師やKの担任教師から、Kの日本語や教科における課題を聞いていたが、その後Kを指導しながら、自らもKの課題を確認していった。塩田の記録とS先生の質問回答紙の答えから「S先生のKに対する印象」と「S先生が見たKの課題」を見ていく。

「S先生のKに対する印象」(2022年4月 塩田の記録)

とても明るく活発な子です。1年生のときは、授業中椅子に座っているのが大変だったそうです。今はだいぶん落ち着きました。ただ、集中力が続かないので、1回の指導に内容の変化が必要です。まだひらがなとカタカナを覚えていません。でも漢字は好きです。100以上の数字の概念が理解しにくいようです。学校での注意事項などは、英語で話したほうがよくわかるようなので、英語で話します。

「S先生から見たKの課題」(2023年7月 質問回答紙)

もともと、前向きで、楽しんで学習できる子だと思いました。ただ、2022年に国際教室で教え始めたときは、教科の理解に困難を抱えているようでした。その原因は、学習への拒否感より、日本語への抵抗感であったように思います。

S先生は、Kに指示を与える場合、Kの母語である英語を使用したほうが、理解が早いと感じていた。1章でKは学校での生活場面でのやり取りに問題がないと書いたが、Kには、英語のほうが理解しやすい言葉だったということであろう。

S先生は、Kが「楽しんで学習できる子」だと見ており、日本語への抵抗感から学習に向くことができないことが課題だと捉えていた。S先生は、Kの課題を、単に言葉の問題と判断せずに、Kの性格を把握した上で、日本語への抵抗感だと判断した。そして、Kの日本語への抵抗感を取り除く指導を考えていく。

### 3. S先生がKに実施した指導とその指導を実施した理由

S先生は、Kの課題である日本語への抵抗感を取り除くために、様々な指導を実施した。その中で、私が特に日本語への抵抗感を取り除くために有効だったのではないかと考える3つの指導を取り上げる。母語である英語の使用による指導、絵本を使用した指導、教科の予習を中心にした先行学習である。それらの指導を実施した理由を塩田の記録、質問回答紙、メールによる回答から見ていく。

### 3. 1. S先生が英語を使用した指導をした理由

2章でも触れたように、S先生は、Kに英語を使用した指導をしていた。その理由を、質問回答紙の答えから見ていく。

#### 〔S先生がKに英語を使用した指導をした理由〕(2023年7月 質問回答紙)

Kは、意思疎通が母語のほうがスムーズでした。また本人の日本語への抵抗感が強いように思ったので、無理に日本語中心にするより、まずは、学びたい気持ちをもってからではないと、学習がスタートできないと思いました。

S先生は、Kが学びたいという気持ちをもつためには、日本語への抵抗感という心理的な要因を緩和する必要があると考え、英語を使用した。Kの気持ちを尊重していたことがわかる。

### 3. 2. S先生が絵本の読み聞かせをした理由

S先生はKが本が好きなおことから、Kに指導開始当初から絵本の読み聞かせをしていた。日本語に抵抗感があったため、最初は英語の絵本から始まり、日本語の絵本に変わり児童書になり、いつしか絵本の読み聞かせをしなくなった。

S先生が指導に絵本を取り入れた理由、絵本の読み聞かせをしなくなった理由を聞いた。

#### 〔S先生が絵本の読み聞かせをした理由〕(2023年7月 質問回答紙)

Kは、同じ年齢の子どもに比べると知っている語彙が少ないので、絵本の中の語彙を知り、また文字読むときに抵抗感がなくなれば良いと思いました。

#### 〔S先生が絵本の読み聞かせをしなくなった理由〕(2023年7月 質問回答紙)

絵本の読み聞かせが少なくなったのは、Kができることが増えて、教科学習にける時間が多くなったからです。絵本の読み聞かせも、Kの習熟度に合わせて絵本を変えました。最初は、日本の幼児が日本の環境で自然と学んでくるであろう言葉が身に付いていないようだったので、絵本から言葉を学べたらと思いました。その時々Kに必要な教材として母語絵本、赤ちゃん向け絵本、幼児絵本、児童書等を扱いました。Kの習熟度に合わせて、教材を変えました。外国のルーツの子どもに関係なく、どの

子の指導にも、個々の習熟の様子によって、適した教材や学習活動があると思います。

S先生は、絵本の読み聞かせをした理由を2つ挙げている。それは、Kの語彙を増やすこと、文字への抵抗感を取り除くことである。絵本や児童書など本の種類をKの習熟度に合わせて変え、さらにKの語彙を増やしたことで、読む力がつき、教科学習に取りかかることができた。

絵本等を使用した指導により、Kの日本語の文字への抵抗感が次第に薄れ、理解できる語彙も増え、教科学習での読む作業に取りかかる力と気持ちが養われたと考えられる。

### 3. 3. S先生が教科内容の先行学習をした理由

S先生が、Kに予習中心の先行学習を実施したのは、2022年の夏休み明けからであった。S先生がKに指導を始めた2022年4月は、S先生が担当していた国際教室では、在籍クラスで理解できない部分を中心に復習する補習的学習をしていた。それを予習を中心とした先行学習に変更した理由を聞いた。

#### 「先行学習を始めた時期と理由」(2023年7月 質問回答紙)

私(S先生)が知っている限り他の学校の国際教室でのほとんどは、補習的学習をしています。ですので、ここでも補習的学習をしてきました。でも、あるとき、これでは、いつまでたっても在籍クラスでの学習に追いつけず、学習への意欲がもてないことに気付きました。それで、夏休み明けから、在籍クラスで学習する内容を予習する、先行学習に変更しました。

S先生は、補習的指導が、Kの学習への意欲に影響があることを感じ、Kには先行学習が適応すると考え、Kの指導を先行学習に変更している。従来の国際教室での指導方法にとらわれず、Kが学習への意欲を持つ最善の方法として、先行学習を取り入れている。

先行学習は、Kの日本語への抵抗感が薄れ、Kが学習に意欲を持つ段階で実施された。先行学習を取り入れた理由からも、Kの精神面を支えることが、Kが学習への意欲を持つために必要だとS先生が考えていたことがわかる。

S先生のKへの指導とその理由を見ると、Kの日本語への抵抗感をなくし、Kを学習に向か

わせ、本来の楽しく学習する姿を取り戻してほしいと願い、様々な指導を実施したことがわかる。Kの日本語への抵抗感をなくすために、Kが理解できる母語での指導、好きな絵本を使用した指導を実施した。Kの日本語への抵抗感が薄れたところで、次の段階である、学習意欲を持たせる先行学習を実施した。Kが学習に向かうように、精神面のサポートをする指導をしていった。

母語による先行学習の成果は岡崎(1997)、朱(2007)、宇津木(2015)等で既に明らかにされている。しかし、S先生は、母語による先行学習が児童の日本語習得と教科学習に効果的であることを知らなかった。母語による先行学習は、S先生がKの精神面を支え、Kを学習に向かわせるために、試行錯誤しながら、いきついた方法であった。

#### 4. Kの変化

KがS先生の指導を受けた1年半の間に、私が特に伸びたと感じたのは、Kの読む力であった。

1章でも記したが、当初、Kは、文字の習得が難しく、読み書きに苦手意識をもっていた。また、S先生もKの課題は、文字も含めて、日本語に抵抗感があることだと指摘していた。しかし、読む力の伸長とともに、Sの学ぶ姿勢にも変化が見られた。Kの読む力の伸長と学ぶ姿勢の変化を私の記録から見ていく。

読む力が伸長し、理解できることが増え、学ぶ姿勢の変化が生まれたと考えるため、読む力の伸長と学ぶ姿勢を切り離すことができない。したがって、本章では、読む力の伸長と学ぶ姿勢の変化をあわせて、Kの変化として述べる。

##### 4. 1. 読む力の伸長とそれにとまなう学びの姿勢の変化

S先生の指導を受け、Kは、文字に対する抵抗感が徐々に減っていった。そして、意欲を持って教科学習に取り組むようになった。それが感じられるS先生の話を示す。

〔国語の教科書を読む力1〕(2022年9月 塩田の記録)

私の指導時間が始まる前に、S先生と話した。S先生が、国語の教科書を開いて、

「今『ニャーゴ』<sup>1</sup>と一緒に読んでいますけど、英語で解説しながら読むと、それぞれの登場人物の気持ちをよく理解できるんです」とS先生がうれしそうに話した。

私がS先生に「Kは、登場人物の気持ちがわかる読み方ができるようになったんですね」と言うと、S先生は「英語で補助は必要ですけど、教科書の文章から登場人物の心情を読み取る力がつきました。」と答えた。

#### 「国語の教科書を読む力2」(2023年1月 塩田の記録)

S先生は、教科書の中の「笠地蔵」の単元をKと読んでいたと言った。昔話なので、言い回しも難しく、箆や笠など、歴史的、文化的知識が必要な物語はなかなか理解できないので、一緒に読むのが大変なのだそうだ。S先生は「もう大変で、二人で汗かきながら読んでいます。」と笑いながら教えてくれた。私がS先生に「Kは、知らない単語や理解できない表現が多いことで、読むのをあきらめることはなくなったんですね。」と言うと、S先生は「Kは物語の内容を理解したいとがんばるようになりました。」と言った。

当初は、文字を見るだけでも拒否感を示していたKが、S先生の指導のもと、物語の登場人物の気持ちを理解できるようになっている。また、昔話は、歴史的、文化的な知識がなければ、理解が難しいが、投げ出さずに読んでいたということだった。私は、それを聞いて驚いた。そして、Kの読む力が伸び、読もうとする意欲も生まれたことを実感した。

#### 「算数の文章題を読む力」(2023年7月 塩田の記録)

Kと算数の文章問題を解いた。以前は文章題を見るだけで、「ここは後で」と言っていて、計算式だけの問題を解いていたKが、すらすらと文章題を音読し始めた。そして、意味を理解して、問題を解き始めた。問題を読む早さと意味の把握の早さに驚いた。文章題を読むのに、私の補助は全く必要なかった。

S先生によると、Kは、文章題をよく理解するようになり、算数のテストでもクラスでも他の子よりできるくらいになったとのことだ。

---

1 小学校2年生の国語の教科書に出てくる物語。



私の指導時に、その話をしてKを褒めると、「算数は難しくない」と得意そうに言った。

Kに最初に会った2022年4月は、Kは日本語の文字を覚えていなかった。短い文を読むのも、文字をみただけでやめてしまっていた。それが、S先生の指導を受けながら少しずつ、文が読めるようになり、意味が理解できるようになり、2022年9月には、教師の補助を受けながら、教科書の物語が理解できるまでになった。読めることで、学習内容が理解できるようになり、それが学習への意欲を生んだのであろう。

S先生にKの変化は、S先生の指導の賜ではないかと話したことがある。そのときに、S先生は、自分の指導がたまたまKの認知発達に合ったのではないかと分析していた。Kの変化は、S先生が分析するようにKの認知発達が関係しているのかもしれない。しかし、S先生がKの精神面を支え、学習への意欲を持たせる指導をしたことで、Kの認知発達に影響を与えたとも言えるのではないだろうか。

## 5. S先生が日本語指導が必要な児童に向き合う姿勢

S先生が、Kに、読む力の伸長、学ぶ姿勢の変化をもたらす指導法や指導内容を考えることができたのは、S先生が日本語指導が必要な児童に向き合う姿勢が関係しているのではないかと考えた。そこで、S先生に、今まで日本語指導が必要な児童にどのように対応してきたかについて質問をした。その回答から、S先生が日本語指導が必要な児童に向き合う姿勢が見いだせると考えた。

### 「担任のクラスでの日本語指導が必要な子どもへの配慮」(2023年9月メールでの質問)

以前、学級担任をしていたときも、日本語指導が必要な子どもがクラスにいました。

児童の学校生活の様子や、テストや授業での理解度によって対応が違いました。重要な行事のお知らせには、訳をつけたり、学習する内容を家庭にお知らせしたりして、母語でも多少家庭でサポートしていただけるように連絡するなどしました。言語に関与してだけでなく、外国ルーツではない日本人児童も、誰しもが配慮や支援が必要なので、「外国ルーツだから」という特別な支援ではなく、その子その子に必要な支援

をしていました。ただ、翻訳となると、クラスに複数人異なる母語の児童がいると、大変でした。

S先生は、日本語指導が必要な子どもに、どのような配慮が必要なのかを考えつつ支援しながらも、どの子どもにも支援が必要だと考え、その中に日本語指導が必要な子どもがいたと述べている。決して「外国ルーツの子ども」や支援が必要な子どもというようにひとくくりに見ることはしていない。個々の子どもの課題を把握することを大切にしていたのであろう。

S先生が、個々の子どもの課題を把握し支援することが必要だと考えていることを踏まえた上で、日本語指導が必要な子どもの指導を考える場合に大切な視点を聞いた。

#### 「日本語指導が必要な子どもの指導を考える場合に大切な視点」(2023年9月メールでの質問)

子ども一人一人背景は様々ですが、どの子も課題があり、支援しなければならないことが多々あります。ですので、外国ルーツの児童の指導は、言語面はもちろんですが、他児童と同様に言語面以外の部分、例えば視覚優位なのか聴覚優位なのか、苦手分野は何か、逆に得意分野は何かなどの複雑な絡みがあり、その課題はとても複雑です。子どもをいろいろな視点から見て、どんな指導が一番適切か見極めるのがとても難しいです。単純に言語習得だけを目指しても解決しません。

S先生は、どの子どもにもその子の課題があり、それに見合う支援が必要だと考えているが、日本語指導が必要な子ども特有の複雑な課題も把握している。S先生は、日本語指導が必要な子どもを教える場合、言語面の課題だけに目が向きがちだが、そこだけを注視しても、他の課題は解決できないことを、日本語指導が必要な児童への指導経験から理解していたとわかる。

3.1で、S先生がKに英語を使った指導をしていたこととその理由を述べた。Kの課題である日本語への抵抗感をなくすためであった。S先生は、Kに限らず他の国際教室の児童にも母語を使用した指導をしていたのだが、その理由にも児童への向き合い方がわかる回答があった。

#### 「国際教室の子どもに母語を使った指導をする理由」(2023年7月 質問回答紙)

外国ルーツの子どもには、学習の楽しさを感じる以前に言語の壁があります。学習内容への抵抗感なく、意欲をもってほしいので、自分が話せる程度で母語を使用して

います。児童自身も言語面、文化面で日本の環境に適応しようと日々頑張っていると思うので、こちら側も、歩み寄ることが大切だと思いました。国際教室にいる時間だけでも、少し息抜きができる空間にすることも大切だと思っています。

S先生が国際教室に通う児童に母語を使用した指導をしたのは、言葉の壁が学習への抵抗感を生むと考えていたからである。そして、その言語の壁が児童を精神的な負担になると考え、母語使用し、児童の精神的な負担を軽減することで、楽しく学習してほしいと考えていた。S先生には、児童に学習の楽しさを知ってもらいたいという願いがあり、それを阻む言葉の壁を乗り越えるための精神的な支えをすることが大切だと強調している。

S先生は日本語指導が必要な子ども特有の課題を理解したうえで、個々の子どもの特性や課題を把握していた。Kの指導と同様、指導する子どもの課題を把握したうえで、個々の子どもに適応する指導を考えていたのであろう。印象的なのは、個々の子どもの課題が「単純に言語習得を目指しただけでは解決し」ないと述べていることである。S先生が、言葉を換えながら何度か言及している、児童が「学習の楽しさを感じる」ことがS先生の目指すことだったと考える。つまり、児童に「言語の壁」を乗り越えさせることだけを目標にしては、学習の楽しさを知るところまでいくことができないということではないだろうか。

Kの例を見ると、S先生は「Kが楽しんで学習できる子」だと見抜いたため、Kの日本語への抵抗感を除くことが、Kが「学習の楽しさを感じる」ことへつながると考えたのであろう。

S先生は、子どもが「学習の楽しさを感じる」という目標に向かって、自分の今までの経験から児童の立場や状況、その子の特性など様々な視点から児童の課題を把握しようとしていた。それが、児童に適応する指導を考え、実施することにつながったのではないだろうか。

## 6. 伴走者としての教師

S先生の指導により、Kの日本語を読む力が伸び、学ぶ姿勢が変化したことから、どうしてKの読む力が飛躍的に伸長し、学ぶ姿勢が変化したのか、Kの読む力の伸長と学ぶ姿勢の変化に、何が必要だったのかという問いが生じた。その答えを明らかにするために、S先生の課題把握の仕方と指導法、その指導法を実施した理由、S先生の児童への向き合い方をS先生への質問から探った。

S先生の指導で特徴的なのは、児童に、なってほしい子ども像を明確に持っている点、それから、その子ども像を目標に、自分の経験や知識と目の前の子どもの特性から、課題を把握し、子どもの精神面を支え、指導を考え実施している点である。

S先生は、日本語指導が必要な子どもに限らず、どの子どもにも「学習の楽しさを感じ」てほしいと願っていた。日本語指導が必要な子どもには、「学習の楽しさを感じる」前に、「言葉の壁」という課題があると考え、「言葉の壁」を乗り越えられるような指導を考え、実施している。その一方で、「言語習得だけを目指しても（課題は）解決しない」と述べているように、自らが日本語指導が必要な子どもに接した経験から、日本語指導が必要な子どもの課題は、言語だけではないと気づいていた。S先生は、「子どもをいろいろな視点から見て、どんな指導が一番適切か見極めるのがとても難しいです。」と述べ、自分の経験や知識及び、個々の子どもの特性などさまざまな視点から、個々の子どもに適応する指導を考えようとしている。

S先生は回答の中で、Kに対する指導で、「学習の楽しさを感じる」ことを目標としていると明確には語っていない。しかし、Kが「もともと、前向きで、楽しんで学習できる子だと思いました」と述べていることと、S先生の全ての子どもに対する目標が「学習の楽しさを感じる」ことであることから、Kにも「学習の楽しさを感じる」ことを目標にしていたことは間違いないであろう。その後のKの課題把握では、今までS先生が日本語指導が必要な子どもの課題を把握してきた経験とKの様子から、Kの課題は、「日本語への抵抗感」だと捉えた。そして、「日本語への抵抗感」を軽減すれば、「もともと楽しんで学習できる」Kは、学習に向かうと考えたのであろう。そして、Kが課題を克服するための指導を考え、Kの精神面を支えながら指導したため、Kは「学習の楽しさを感じる」段階まで進むことができた。S先生の指導により、Kの読む力の伸長が著しかったが、それは、S先生の指導で、Kの文字に対する抵抗感が次第になくなり、読むことに向かうようになったことが大きいのではないだろうか。

そして、読むことが苦ではなくなることで、教科学習内容が理解できるようになり、学習が楽しくなり、学習への姿勢も変化したと思われる。ただ、4. 1. で述べたようにKの読む力の伸長には、Kの認知発達に影響している可能性がある。そうだとすると、S先生がKの「日本語への抵抗感」を軽減する指導をしなければ、読むことには向かっていなかったかもしれない。

Kの読む力の伸長に必要なのは、S先生が自らの描く子ども像を目標に、自分の経験や知識からの的確にKの課題を把握し、Kが課題を克服し、目標に向かうために試行錯誤して実施した指導であった。ここで注意したいのは、S先生が目標とする子ども像がKへの押しつ

けになっていなかったかという点である。S先生の「学習の楽しさ」を感じる子どもという目標は、学習の到達点ではなく、通過点である。「学習の楽しさ」を知った子どもは、好奇心をもち、更に学ぼうとし、子どもの世界を広げていくであろう。その後の学習の目標は、それぞれの子どもが決めることである。そのため、決して押しつける目標ではなく、子どもの自主性を重んじ、子どもの今後を見据えた目標だと言える。また、目標に向かって実施された指導も、Kの特性や興味関心、気持ちを尊重し、考えていることから、決してS先生の独りよがりの指導にはなっていない。KとともにKだけのKに合う指導を探ってきたと言える。

文部科学省中央教育審議会(2021)は、「実現すべき教師の姿」として、「子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」(p. 12)と提示している。S先生のKへの向き合い方はまさに伴走者としての向き合い方であったのではないだろうか。

今回提示したのは、K1人の例であるが、S先生の子どもへの向き合い方、目標に向かった課題把握、指導方法の模索、実施という指導過程には、他の児童への指導の示唆があるのではないだろうか。

おそらく、S先生は日本語指導が必要ないずれの子どもに対しても、伴走者として同様の指導を行っていると考えられる。その他の子どもS先生の指導でKと同様に、「学習の楽しさ」を感じるようになったのかは、今後さらに調査したい。

## 文献

宇津木奈美子(2017). マイノリティの子ども達に対する学習権の保障『日本学習社会学会年報』13, 43-45.

岡崎敏雄(1997). 日本語・母語相互育成学習のねらい『平成8年度外国人児童生徒指導資料』(pp. 1-7)茨城県教育庁指導課.

朱桂栄(2007). 『新しい日本語教育の視点——子どもの母語を考える』鳳書房.

文部科学省中央教育審議会(2021). 「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/senseioun/mext\\_01317.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseioun/mext_01317.html), 2023年8月20日閲覧